

---

# ただ幸福を感じる（リズヴァーン×望美）

efyin

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ただ幸福を感じる（リズヴァーン×望美）

### 【Nコード】

N3642D

### 【作者名】

efyin

### 【あらすじ】

悪夢を見ると、リズ先生にもつと愛を与えて下さいと願う。願いが叶うと悪夢を打ち破る凄まじい破壊力の幸せが生じる。その幸せに乗って悪夢から逃げる。

遙か昔、京を穢して滅ぼし、

我が物にしようとして数百年に渡り暗躍していた鬼の一族は、京を守るために選ばれた先代の龍神の神子の前に敗れた。

そして現在の神子の時代、

数奇な運命により龍神の神子の仇敵とも言うべき鬼の一族の生き残りから

龍神の神子を守護する八葉が出た。

その鬼は神子を愛し、神子に強く望まれて夫となり、二人は鞍馬山にある居に落ち着いた。

小屋の周囲は林で、枝が小屋を覆うように繁り、

玄関と縁側は月と空を眺められる程度に開けていた。

その小屋に住んでいる夫の方は金髪碧眼、

かつて鬼と呼ばれた一族の生き残りであるリズヴァーン。

そして妻の方は白龍により異世界から召喚された神子、望美。

就寝前、リズヴァーンは部屋に聖なる香を炊いて煙で部屋を清める。

今日は帰りが遅いらしいので

（弟子の九郎さんが、同じ玄武の仲間である敦盛さんに会いに行っているんだろう）

望美は彼の代わりに香を炊いた。

「この香り、ほっとする」

望美は呟いて、深呼吸をした。

不意に部屋の一カ所に冷たい風を感じ、煙が揺らぐ。

何も無い空間からリズヴァーンが出て来た。

「母が生きていたとしたら、

その言葉を聞いて喜んだだろう……それは母の好きな香りだった」  
望美ははっとする。リズヴァーンは大家族の末子だった。

しかし彼の村は怨霊に襲われ、彼以外の家族や村の人々は炎に包ま

れた。

「あ。ごめんなさい、私のせいで辛い思い出を」

焚火の光に、リズヴァーンの豊かな金髪が煌めく。

「案ずる事はない。」

母や兄姉の事、辛い時もあるが……私はお前のお陰で満たされていくばかりだ」

今、彼女の中には自分の命が宿っている。

「私、何と言われようと先生が好きですから」

言つて、望美はリズヴァーンの広い胸に顔を押し付けた。

「私との愛情ある生活は、

私や先生にとって今までよりもっともいい運命になるはずですよね？」

「望美……私の夢は一つ、お前の望むままに」

布団に横になった際、望美は最近気になっている事を語った。

「あの、先生。実は先生に相談したいことがあつて」

リズヴァーンは望美の手を握り、頷いた。

「うむ。聞かせてくれ」

ここ数日、望美はある夢を見るようになっていた。

（ここは川？違う。閻が川みたいに流れている。

ただ、誰もいない、何も無い空間みたいだけど……）

その暗い空間に潜む、得体の知れない何かに腕を傷つけられ、血を流した。

夢の中なので痛みは無いが。

「怖くなった私が閻から逃げて八葉の皆や朔や白龍のいる所に戻ると、

真つ先に気付いた先生が無言で手当てをしてくれました。

もう先生から離れないと強く思いました。

他にも、周りに誰もいない時に九朗さんと力の限り叫んだら先生が答えてくれて、

最高に嬉しかったって場面もあつたんです」

日が経過するにつれ、夢の中に登場する人間は自然と減り、気がつけば九郎、敦盛、望美の三人になった。

（望美、あそこだ。敦盛がいる。……敦盛！）

九郎が夢の中で叫ぶ。

（待って！敦盛さん！敦盛さん！一体どこに行くんですか！？）

これはつい昨日の夢で、敦盛が何かに引かれるように闇の方へ進み始めたのだった。

リズヴァーンは途中で眠ってしまった望美の額に手をやり、目を閉じた。

望美の夢に己の気を同調させ、起きている間見えない存在を感知しようとする。

まず、敦盛の状態を知る必要があった。

（……敦盛）

闇の濃い方へ歩く敦盛を見つけ、リズヴァーンが呼び掛ける。

（敦盛。何処へ行く。答えなさい）

敦盛は虚ろな目で答えた。

（こちら側……は明る過ぎて……眠れ……ないのだ……）

「九郎は呼びかけると反応するし声も力があるが……敦盛はほとんど反応が無い」

リズヴァーンは目を覚まし、小さく呟いた。再び目を閉じ、望美の夢を覗く。

夢の中の望美と九郎に語りかけた。

「敦盛は正常な判断が出来ていない。向こう側に着いてしまったら終わりだ。

夢の中とは言え、現実の彼にも、お前達にも影響があるかもしれぬ。全力で助けてあげなさい」

「はい！」

二人は真剣に返事をして敦盛を呼び、近付いて励まし続けたが、敦盛は止めても向こう岸へ行こうとし、その後錯乱した。

自分を救おうとしている望美や九郎に暴れかかる。

「敦盛さんっ」

「敦盛、従え」

九郎が敦盛を組み伏せる。

「俺の評判を落とす事になるがやむを得ん」

望美が顔を反らし、敦盛の悲鳴が響く。九郎が彼の鳩尾に軽く拳を当てたのだ。

不意に闇が更に濃くなった。

「望美！敦盛！俺をつかめ！捕まってるよ！一緒なら助かるからな！」

九郎が後の二人を引き寄せ、叫ぶ。

「な、ぜ……行かせぬ」

と、苦しそうな顔で、敦盛。

「無事に帰って、俺に八つ当たりをすればいいだろう！」

九郎のその言葉で、上空から細い光が射した。

「九郎。望美。二人とも、じっとしていなさい」

リズヴァーンの声が響き、敦盛が光に包まれて消えた。

「よくやった二人とも。全て終わった。すごい頑張りだ……大きくなったな」

「先生にそう言って頂けるのは光栄です！」

「私も、本当に嬉しいです！！」

九郎と望美がほぼ同時に口を開く。リズヴァーンがそんな二人を見てふわりと笑う。

「姿は違っても、考える事は同じだな。よく似ている」

九郎が気遣わしげに発言した。

「俺と望美がですか？ほう。先生が冗談とは……不思議ですね」

「先生ったら。私、その意味知ってますよ？」

望美が拗ねたように言った。

「ふふっそうか……」

望美の胸に、リズヴァーンの言葉が蘇る。

（実践で頼れるのは自分の腕だけだ。だから、自分の腕を信用しな

さい)

尊敬の念が込み上げて来て、望美はリズヴァーンに寄り掛かる。

「何か、先生って……色々な意味で大きいです」

一方、九朗もリズヴァーンの言葉を思い出していた。

(九朗。夢は、いつも大きく持ちなさい)

「俺は幼い頃から自分の信念に従い、それを貫いて来た。その一つが先生の言葉だ」

九朗が呟く。

(九朗。お前には力がある。後はどう使うかだ。

それから、信頼できる仲間をたくさん見つけて、仲間の力も信じなさい。

戦いとは、一人でするものではないのだから)

「俺も、先生が側にいてくれる限り迷いません」

リズヴァーンは二人の頭に手をやった。

「夢から覚める前に伝えておこう。

いつも祈っている……お前達の目の前に、見晴らしのよい世界が広がっているように」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3642d/>

---

ただ幸福を感じる（リズヴァーン×望美）

2010年10月12日00時09分発行